

非諧古今抄 再撰貞享

日之一

△ 5  
922  
1

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN

門  
號  
歸  
卷  
1

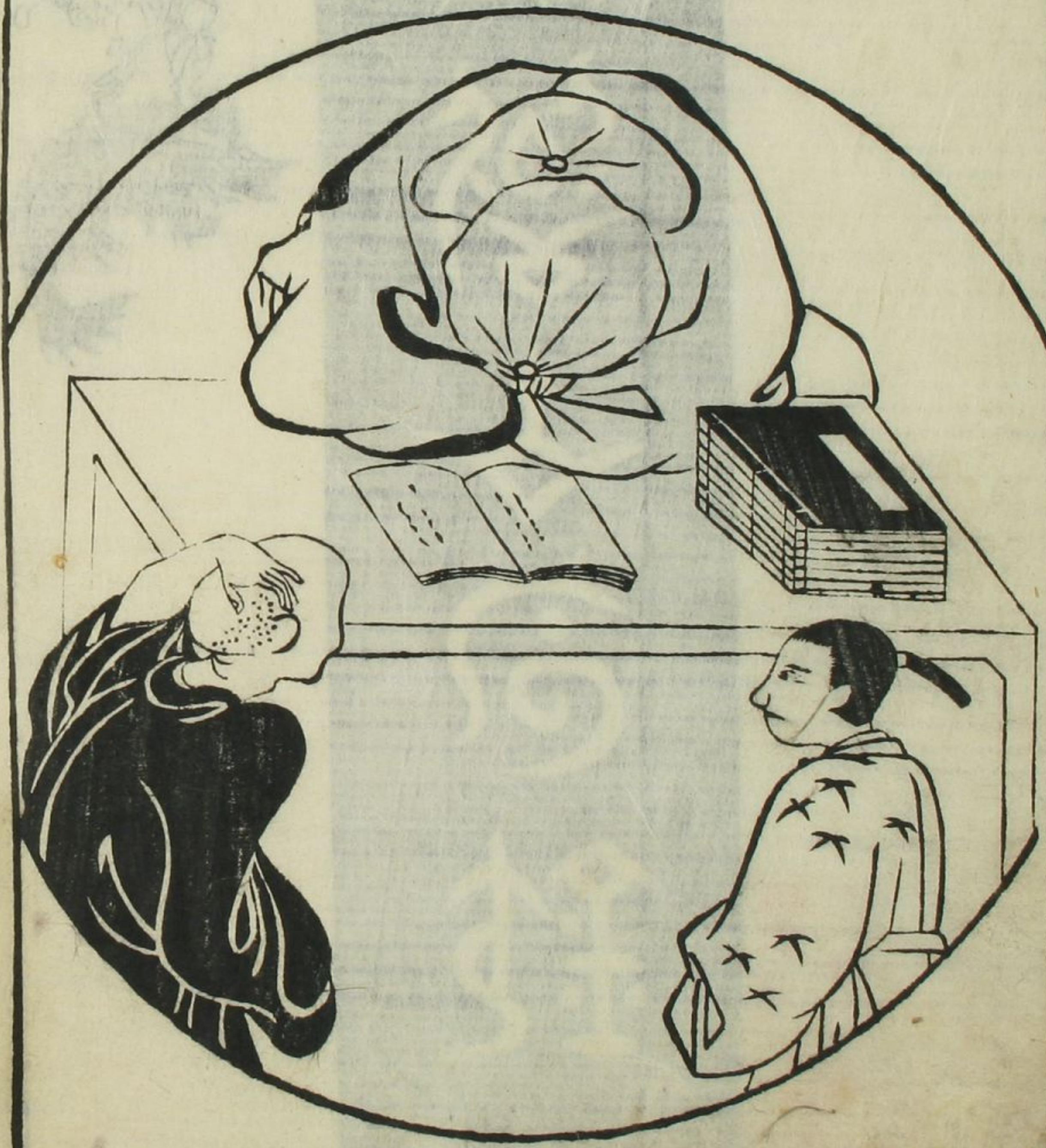
月  
火  
水  
金  
木



水  
火  
金  
木  
土  
月  
火  
水  
金  
木

明  
世  
人  
一  
月  
火  
水  
金  
木

# 圖 頻 爭



他誥左ノトお至じく上

蓮二房

物序

皇朝詩書

アシテ他誥左ノトお至じく上  
ノト清松首セニテモトヨリ内ノト松に名トナシ而  
テ詠諺の一通と傳ヘト素臣の詠名セモ名ト  
稱ヘ清松首ハムダ能誥ノトヨリトテ千葉一良  
ノ姓ナムトヨリ傳仰を承のらまシトナレテ詠美  
と家ノ松法スルマミタキナタレトシタルモナシ  
ヒテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ

連歌の事あると云ひて連歌にて連歌にて重音を繰り  
玉ると云ひてまた今集にいわちるモ連の實譜  
もく詠説の事あると云ひて詠説は和歌の事と連歌  
の事し人偏と云ひて字論あれと詠と和歌の事  
訓より例へ歌の事とは云う代行の對一  
穿鑿と云ふ事と云ひて詠説と俳諧とと  
穿鑿と云ふ事と云ひて詠説と俳諧とと  
穿鑿と云ふ事と云ひて詠説と俳諧とと  
えと一言す射の用と云ふに云ひてと  
もくと云ふ事と云ひてと云ひてと云ひてと  
詠説の事あると云ひて連歌の東をまと  
詠説の東をまと

あつまひて中向の十九條へとへ詠説の源言  
やじきおの罪と云ひてと云ひて高町へと  
やじき他説と詠説の事と云ひてと云ひて  
の用と云とあつてはて詠説の事と云ひてと云ひて  
の事と云ひてと云ひてと云ひてと云ひてと云ひて  
せな角條へた傳の格と云ひてと云ひてと  
ひてと云ひてと云ひてと云ひてと云ひてと  
ひてと云ひてと云ひてと云ひてと云ひてと  
一部の次やを例へ上中下せんをらむと月。月。月。  
と云ひてと云ひて詠説の十九條と云ふ

これらは先作の附録と二冊に分けて一部  
又再あるせしも題をせ走り不ともがす連歌と  
行をかきよけとせむぞ詠説を連三にゆてア  
遠く古代の滑稽音とたゞ近く今時の俳諧と  
ひらむるより能説。今おどと名づくるらむト  
さしく一部の土地とすと祖孫の能説と古とれま  
とそ千葉一斬の科訓あれ。先師の古とれま  
空とほあじとる一刀兩断のは詔めりてまみ  
連歌の兩式よりも今年とつしままわらこつとは  
和えざるとやねあう詠言連歌の五ふのあれ

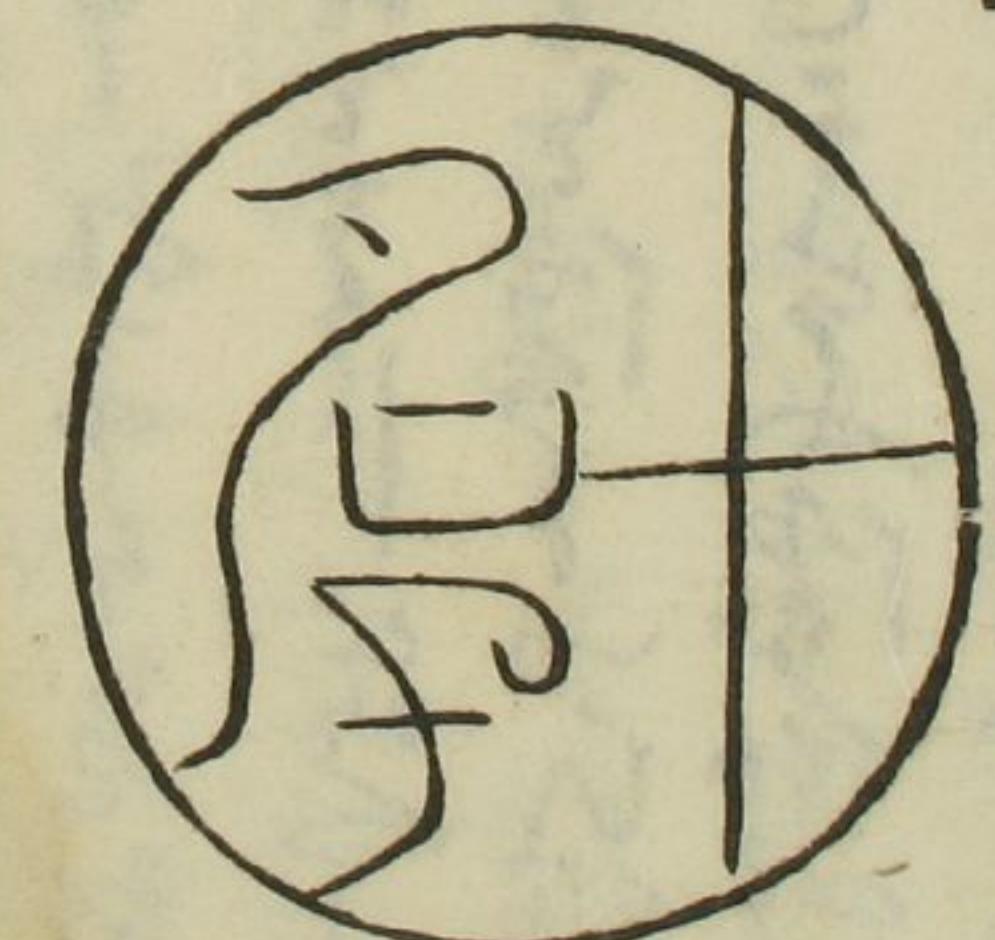
云ふ敵上の活興とくらむと士農工商の事に  
へえもとくらむとむと豊詞とあひて憐憫せよ語  
とあらむじとくらむ能謡の口角とくねよとくね  
の言ひあひやあひに連歌といふすとあひ  
はア詠歌とりくみとくらむとくらむ連歌の能説  
とんじて真幸哉え年も月もげはげばと製衣  
洋と論されや中の能謡と皆く連歌の年月  
とすと詠歌とすとあらむとくらむとくね  
年と四年ととくらむとくらむとくね

きしひあらんやあらへ寄らるになまくとふ  
せんこれ能作のむとすれもまことかくも詞と  
ひがけて連うせ改めがてわがことくにほの  
名とそくアソブにほのむとひととくに近と  
あへ眼ととくアソブにほのむとひととくに近と  
まくにまくにほのむとひととくに近と  
名がまくにほのむとひととくに近と  
えく胡蝶の身へアソブにほのむとひととくに近  
た本うちやいと一箇の身とよみ取ると  
燃灯のいとほくアソブにほのむとひととくに近

おとづりていたのあとをつまれますを敷のま  
とまよとそがときつてまたまとまとま  
とまよの跡とそがまんと傳つてゆき  
アソブの初とあるやいとよ傳而の大道  
スミとお祖の御とおとづりとしのむにひあ  
て百尋とくせ壁とあきれて祖廟を先帝せ  
延接するやうと翁人の感仰と慕めてハ  
ハ全く柳子門の大任アソブを運んでお  
おとづりと西キを本ぐ一節の後だす

一正の私とひれさんとああてるは國のひく  
せひつ岩きの鐘が而ひよ神と説めとおこ  
おひあらそひの林せじよまよひひびの所せ御  
ひとて併詔のこよせふくねまく

立子保巳酉ノ月吉祥日



### 古今折凡例

- 一 此抄ニ○行接トハ祖翁ノ用捨ナリ其下ニ新古ト  
達同ラ考ヘシ△再接<sup>フタセ</sup>トハ先師ノ監察ニシテニ接  
十六蓮ニカ拾遺ナリ三只ハ今ノ相效<sup>ハシマ</sup>ニ知ヘシ
- 一 此抄ニ多評ト要議ト明監トニ改ノ差別アハ法ニ  
支配ノ輕重アレハニ座トスイ一セトエイ百世ト云ナリ  
總テハ新古ノ決論三百慮一失ノ辞宜ト知ヘシ
- 一 此抄ノ省法ノ下ニモハ家語ノ詞ヲ假テ實。猛ノニキラ  
五ノ制度ニ時代ノ変ラムイ变ハ用ルハ其人ノ自在

ミテ用ナレハ其人ノ不自在トハ今式ニムラ礼明セスア  
古風ノ偏屈ラ山明シトナリ或ハ先師ノ再撰ノ下ニ置  
如是ドハ私經ノ如是我聞ニテ減後ニ再撰誓言語ナリ  
一此抄ニ證句ヲ采キニ至ラ定テ名衆ナキハ總テ祖翁  
ノ證句ナリ系シ定メスヘ此印ヲ書テ直ニ送書ナル  
多々先師ノ證句ナリ但シ別人ハ句下ニ其名アリ  
一此抄ヨリ園ノ印ハ總テ文法ト句格ナリ卷ニ文字  
ノ傍ニ隔テ自園ノ印也ハ或ハ幼字ノ節目ト知ヘラ  
或ハ對詔ノ相效ト知ヘク或ハ改ノ要文ト知ヘレ  
一此抄ニ古エトハ多々連音ノ兩式ヲ指レ古抄トハ更傳ノ

佛金ヨリ埋木噦竹ノ類ナト一部ニ埋木ノ名ヲ指  
サル師資ノ辞讓ラ安カスキナリ或ハ稀ニ本エト  
云ハ今ノ貞吉子ホノ本文ヲ指テナリ

ア此抄ニ異名異財トハ或ハ牡丹ラ尔見草トハ異名  
ナリ牡丹詩トハ異財ナリ或ハ音訓ノ差別トハ自雲  
ラシララモトエニ名ハ異ニテ財ハ同じ也故ニ異共  
トエニ異財ニトエル今或ト古抄ノ邊ノ千箇條  
ノ古法ノ下ニ悉知スレ

再撰<sup>名</sup><sub>元</sub>貞享式序 並目録

東方山房

貞享せむしりへす同と申たるの詫語と今お他詫  
こそとゆう詫語の事ひあるから白馬のてす法  
ととくりて詫と申す條はひらか後と申すとれ條  
とあるもさす九條を今お同せばいに貞享  
の代辰よりえ祿の癸酉より乙未の間を撰あれ  
他詫の時代とまじてあく貞享式と題す  
へ候後とけ人の称名ちりやせんしく一部の詫  
きりやくも此を人の所拿といひらんまほせん

の詫はととくりて詫言連詫の所店と云ふと他詫  
いきと次第の論のドアで士農工商の人と云ふ  
ト字じ達の全言とり併申せ夙新とあつりに  
そせら十九條の裁断を詫言の字論といす  
「赤向」か子のそなむり服の物をしやおこ葉  
遠はしやを八月せあめうひ持多と云葉と同名  
異用の詫あるもとあくと古姓の名同  
いふ字の蓄用と云ふと申とと秋行の走派<sup>アマ</sup>と  
はともかくと云う字と申すと秋行の走派<sup>アマ</sup>  
がれ草伴昇の室に撰アマと或と相致の書入

あり或とちて消えりありてモ附せ  
ムシテ口説めば左に右されハタマ再説  
の場所の左に右に左に右に左に右に左に右に  
お角のあやめり向んとあくと竹林のまく  
あんと鬼園の用事とほくと松の木とせせ  
達を左んと左の偏圓あよめとよく武落  
ゆ左行へと説けオとせくとせくとせく  
不とけ書とり一巻一巻の宣とととととととととと  
詠説の  
左行へとあれと俳諧のふう式へかのまこととと  
左行へとあれと俳諧のふう式へかのまこととと

左行へとけ撰のが理とまうて俳諧をりへはまの  
論とくづきとせはる五倫の文とやうすく詠諷  
詠美の用ぢりととしあくーかよととくべ  
ととまじとまじゆく故焉の詠社へてそぞ建行  
のことだとえりとせんそ詳惺

寶永七庚寅十月十二日

真言式同録

大段ハ本式ノ同録ナリ  
小段ハ再撰ノ附録ナリ

- 一 俳諧と詠諧と字論せ事  
他諧と詠諧の通ある事  
一一六義と今之和訓せ事  
多發句とゆ字せ事にあり事  
附 心やのす 中やのす

挨拶やのす

- 一切て二語の差ふある事

附 二字やのす 二字やのす

三段やのす 二段やのす

- 一心やと多々名ある事

附 どもつのす 千もつのす

- 一 押字と捺字せ事

附 句讀やのす

- 大廻のす まがゆのす

- 一二品のうふせ事

附 併成のす

穀物のす

一 こひかや。のすれ事

附 うたすのす 一。そすのす

一 百韻。表八句れ事

附 発句。ゆのす 服。衣子のす

オニ。木余波のす 四句の短歌

一 四折。曲節。せれ事

附 無向と句作のす

撰集。あらね。口す

一 月花。せれ事

一 指合とま縁。せれ事

一 憂。くわあ

一 季が節の跨ぐる物れ事

附 二季。二季。四季。くりぐる物のす

一 季とあぐ。新とあぐ。物れ事

一 各所。雜の發句れ事

附 新。財。のす 四季。格。のす

詠。清。え。のす

一四季の名類記事

一伽誥と假名遣記事

總合十九條

古今歌序同終

再撰貞享辛  
月之二

古今伽誥序

芭蕉庵

古事記の伽誥と二年歳のじつと名ありて  
周奉年といひ、夙諫ともされ、後觀の角と詮笑と  
いふしれ、史記と云ふれ門の書と云ふて  
和漢と風雅の二ととあるをとり多くに中し  
の詮笑と子と應安の新式とばとちい慶長  
の傳年といひ、かうして総合とぞとーも種と  
さくもくとくとてんせの云々とあくて東波よ

まほりとすをあへ それも中ちの詠説へまに  
連えせむとぞひて はな詠説の後言とあり  
今セ他説の姿とひとよすてよきひとふ  
あうへしたれのらひひとせんちらよきとされを  
仰家は教説の二はあううとくせんりあじま  
りそりもよとも大和の風雅と御靈の風とされ  
口言語をあくの聲あんきやうとたるの  
詞しせすにと被りはとあれとはと被りが  
ことおよ法事の的語 一ではとく連歌の  
むすき效みとせりとくはよ詠説めりび

唐とすとぞ 言ふあそひ遊くや室とすと秋叶と  
はとをじへすとや要典の控へるゝとりあ  
かとこうさんととあひへはき年月よやとこす  
とさくら和歌しわせせせ年ひいわくらす  
れの家訓も實政権政の家訓と称し實政  
あひとくよとくちとおひりよ て他説の前説と  
ちり張こまゆのまひぐへて葉の前説と  
まほとあれハ櫛く葉とさらとすや實くや  
く善ととくじへれかえんはまのま櫛とくを  
て用やうとモ人の首をす て用ひてりとモ人の

不自在と云へば或ひもれ前め  
ニシテトドケテ彼の御金より嘆哉のとき  
モカタマムソトモトヨリヤトウ耳、同の  
ことをあんまり取捨ミ一子の私あく今や一種を  
察するに近く一世の實譜と歴史遠く百世  
の歴史よりはモア天理の眞命とする一子を  
そぞそ一部の技記トナリハキの私とくま  
はホの名と云ふと、さる。

貞享五年戊辰孟春如意日

再撰貞享手本

○俳諧と詠諧と字論七事

じうり俳諧と詠諧とを和音の字と字論  
あれと詠す史記の素隱、清和皆、猶俳諧と  
恵ちり詠文ありて、くわなくせほ林も詠諧の名  
へがけてゐようとなむのやじ、延喜の仰代北  
おや葉ヨリ詠語のニシテヨリノ和歌の解  
とあともり拾遺草もれをニシテ用やく澤と  
同名の他諧ちりや傳より各の詠諧ちりや古之集

王國假名もされどもあやかしにせよ  
「詫譖」ことよりまれりつゝこと凡物の如家  
をねりらむあるはモ、ほおとくも解くれりて  
「能語」二つ「詫譖」二つ「能語」四つ「滑稽」云  
は輔の奥怪おこしゆて室祖の音まよと詫ハ  
甫尾ゆう詫ハ胡首ゆとあれへ化説と詫説を  
す名う詫譖の非背あくとやむをなれども重  
づり代へて詫の子と申しあうへ皆ゆよよま  
てえととあくとふあれへ化行と對へて室設をき  
へうゆれとるの御詠ひひて仰設せおま

うといたひや

東菴云「再撰もたんけ體をほくへん偏の  
体、字すよゆつて一家の走立のよじとくわわと  
矯せ慎格とてしたるの書せ寫當とげく  
「化行」を繋ぎもつともととを例へ我のの  
遜言らうともうべスト批論、うり運主せす用  
ひがも詫譖の名あと廢減して今のが能語せ  
當用とえども同大異のなとありてあれ  
アリとも他譖の遊戯らうとさよとすくと  
詫譖の空虚らうとおそれて中古の詫譖の用

とす用ととあへば、必ず眞言寺の山にちね  
るべからずと申すて、又かたむけられぬと  
は、うへ

○ 他説と訟諫の道あり事

天地位していきまくは天をありせんありて通  
じて、かゝりと人たとそとそりまくもとと人附  
の私りて、二節のまくしありて書かれて  
西々とあやめと秋かと題して、まくし來来と  
もくおひみする室と云ふて、現在と云ふて

此のを在楊墨のまく風を以つて、もと藝の術の  
そくすアセ曲居ニ高の家業と云ふて歌連他  
の貞狂と云ふと人間のせにと云ふてされ  
中ノ他説の二説と清史と滑稽旨の各へづか  
用夫おれし、一もととんかあられも魏晋のな  
もばくさかと今とてに周ぐりニシテ余處へ  
るあうてはあくとつよまや。ハ接とくに他説の  
道へを走るの高きと云ふれど、より傳承の歴史  
とやうけて訟諫と云ふて、訟業と  
法とあつて、是によへうの用と云ふてあつて、いふ

訊諫し詫笑し滑稽旨々贊詔の如きもあらず  
ちとゝもとあれにてはとく又倫の和と本づて  
君父の善ととくよんす。婦人の悪とともじもし  
善と書く要と西とて直言とて直諫  
それば財主人の機縫とやうせたれと云ひの  
大ふとくのやうれいじりとくのれ、悪と善とゆくと  
あまとあくとくのれ、悪と善とゆくと  
傳仰の一音と感に動かされれて或と善るより  
口りあやと殷討のとき、惡王とされ、惡と  
惡とありて比干の脣とモロモロ悪人の肝

とちくらむたんじりと人間の善悪とくわ  
八方偏照の光明とくわらへ神震動等特  
とあらざりて人トヤアゲて我をもひうかく  
いふ、楚の子西と魯王の供とててそとく  
詫笑す。楚王の怨をきくやうを取  
そとく傳仰のますし諫官の五義才す。訊諫  
うち最上ともかか子西とくわおひなじや  
傳仰の傳仰にと捉はずといひ盜跖と云ふとのれ  
うかとくもりて、もす善人とあらじく智にわ  
取せるにれますもあら我祖とあられあく詫笑と

今獻れやくされト直諫より人せひせアモテ在今  
ト恐人の心をもあざめきアモそれハ他説の  
今アリニ流國齊家が一助アリテ冗長と云ひ  
又論トやアリトノハ儒仰の大々と云ふを知  
一毛もとぞレ訣諫ちり一毛に加リムニノ嘲  
贊トヨ正諫アマテ明節アマス即明節アマス不可アシタ以久安也故  
詎諧アマテ取容アマスソシモ世贊トヨ訣諫のゆ和アマストトク  
然文ト訣笑アマスの邪視アマストニトアラテ詳アマスハ詔アマストモ有  
今アリニテアリニテアリニテアリニテアリニテ  
主事やと笑ふ高達アマスの风アマスあさい敏捷アマスの智アマス

はゆりてたゞひを左相に川のすとまし一言の下に筋破  
ノノ歌人連音も指譲るあつてうそもあつて建物の  
きよをくず虚室のじよもにまづよばへまづるに  
せせし人和音あよきともちねむかの令角刷シテ  
京壇カツク事トシヒ言ヒガタレ頬圓カクエン樂ヨハ也ハ贊ホメ詞シメ一分イチブ向  
のきよひあわせやそぞく一瓦イチガマ人の事モノゆめとほんて  
一瓦イチガマの事モノすうきとくちよアツ川カワ危ケルか  
まん手マントも金カネと通スルぬれ不スルアフタアフタアフタアフタ藝エキ  
よとすあいり也ハ自證シヨウトキテ  
たゞくタツク他證カタシヨウを高タカシマ下シタマ媒メイうらとまづく連歌センゴ

わくをと詠誒スカが、さと五七七句法と言誒の  
ありひつて例の詠諫より云通とあ。例た  
詠笑スカと云ふはとあると一先より然ひ遠く  
不そして式月をせしむる事無くよや

東菴トウナンと云い一派の墨文と傳ひゆる者近遠各  
説セツ系キの人が高舉タケフと號す。能誒ノウスカと  
せばの隨一とあらず。とと達門タツモンの之せと  
つへ下字に達の用タカヒと文章の虛ウツ實ミタマに  
えに勘破カクホクとくにあく。われの大言  
甚子シナガの虛誑ウツタマを考アリ似シム天道

の太タケとくもりタモリ人道のドドらすもスカまん  
虚ウツ實ミタマの虚ウツ實ミタマいふとあく。まこと  
他タチの様マダラうつゆくまこと能誒の

高舉タケフ也

○六義と今カタニの和訓せ事

詠笑スカは六義と云ふと爲スルべからずかく  
我ガあくはたと集シラフひやうりスカ連ツキと詠誒し  
をの跡スカとくりスカ眞マサニの詠頌スカとも云フのちよ  
各同スカての詠頌スカと經スカと爲スル賦スカと譯スカと

あるを詩の行義れば古よりとせよとされり  
六事の序と和漢ともに今あるまとむと集の  
古近もがくとて種々といへんすれどえあるま  
きとづらうとく毛がよたまひす白毛やまされ  
おのやうし賦比興のこゑと訓じては  
てあひ和音とありせし連音とひびと一聲一篇  
の約あくとせや首叶せ詠があとどく  
相思せばはとてつる。今接とくたて詠比  
差ふと夙頃のこ経とせ闇の人ひと詠論  
圍睢と哀乐ととあつうとく王侯士庶の心

とほやうち跡比興のこ縁とく眼界の草物と詠詠  
して論詔と文質とやうやうことくさ熟竹木の  
名ともうしらにすむとくとやうせは學び詠歌  
の風姿とくとくせれ年の優游とせられけり  
い玉有れりあひうて天下せはれりとくをゆ  
ちとくとくあれ、能活の六事義とせ利と人和北  
ニ用とくとく各用とゆりあをとくを名とく用  
とくとくとく引向とくゆとくりのましかよま  
高緑と高色の蓄用と和刻のあやとあるへふせ  
れとく能活の新製とく御くれとく和摩の字

字ありモテ先と称内の寔謹よりて而

風

訓義ニ凡トハ詣諭ナリ爰ニ風言ト訓スレ和歌ニ  
ハ副歌ト訓レヌレト比興ニ歎ニ紛ハレ毛詩曰凡者

多出於里巷歌謡之作男女相與詠歌各謡  
其情周南召南親被文王之化二之廟為凡詩  
之正經云然ハ其國其人ノ風俗ノ蓋區ラ凡謡ニ  
依附テ差ニ故ニ化トモ註セナリ○今按スルニ  
凡仁モ凡俗モ總テ詩歌ノ詔諭ニシテ上所ビスルイト  
下所習曰俗トモ上以凡化下下以凡刺上トモムヘリ  
何モ時代向謡ニ録倉代ニ菖蒲ノ謡ラ作りテ

雅

其代ノ俗樂ラ刺ニ類ナリ○獨按スルニ我家ノ訓  
美ニハ凡諭ニ字ノ意ラ運ニテ諭言ト訓スキヤ  
然ラハ佛詣ノ字ト成セル詔諭ノ和ニモ叶フヘンカ  
去ニハ名ト太騒ナハ此等ハ而世ノ明監ラ待ヘシ  
訓義ニ雅ハ正ナリ直ナリ爰ニハ正言ト訓スレ和歌  
ニハ直言ト訓レヌレト平詣ノ徒言ニ紛レヌシ  
体詣ハ音詣響ラ憇ルヘシ○今按スルニ雅ニ歎  
ハ漢士ニ詩經ノ所成ニレテ凡ハ虛ラ以テ天ニ起リ雅  
ハ實ラ以テ地ニ止レ詩經ハ此ニ美ニ溫觴ニ乾坤  
ニ全ト成セリ故ニ我家ニハ雅ラ虛实ノ二用

ト見テ凡ニ懲惡ノ虛ラ用イ雅ニ勸善ノ天シ用  
レハ雅ニ正直ノ意ヲ汲テ公言ト訓スキヤ等  
ハ異名同躰ノ例ニテ一也ノ眾議ニ據ヘキナリ

## 頌

訓ヌミ頌ハ称ナリ義ナリ爰ニ祝言ト訓スシ和歌  
ニモ祝焉ト訓レテ引歌モ紹レ前ナシ茲ニ詩序  
ニ雅頌ハ一躰ノ様ナト雅ニハ國家ノ詛諫ヲ含ム  
頌ニ君父ノ奇量ヲ祝シテ神ニ告ル意ハ勿論ニヤ  
此故ニ六美引歌モ頌ノ躰ノニ明ニテ其外五名  
ハ紹ハシ○今按スルニモ詩ニモ雅頌ノ而朝廷郊廟  
樂歌之詞其詔和而并其美寛而密正

之於雅以大其規和之於頌以小其止也  
詩之大旨也云然ニ雅頌ノ二用タル外ニハ無密  
次ナラ備ニテ詛諫ノ正直ラ行ヘソ内ニハ和實ノ情  
ラ含ミテ詩ニノ優美ヲ調シ爰ラれ子ノ墨墨  
給ニ文王ノ文ニシテ孔子ヲ我家ノ太祖ト感ニ自卑  
和節王所謂ナリ之經八脩温厲ラ知キナリ

賦  
訓義ニ賦ハ鋪ナリ墨ナリ美ニハ義言ト訓スレ和歌  
ニ主義歌トアリ文選ノ李莊ニモ衆事明白ナリ  
ト云ハ眼前ノ物ラ義並テ直地次ナ情ラ演レソ  
謂ナリ定義獨ノ叔文ニモ賦ハ歌人ノ本意ナリト

四季ニ月季ヨノ季麥相ラ詠レ花阜ノ優游シ知レト  
ナリ賦ハ殊ニ文章ノ物名ナリ

比  
訓美ニ比ハ比喻ナリ爰ニ準<sup>ナツス</sup>言ト訓スヘシ和歌ニ七  
准歌トアリ侵ニ托物比興トハ詩人歌人ノ優游情  
ラ核<sup>テ</sup>阜ニ木ニモ物ヲ言<sup>ス</sup>類ナリ或<sup>ハ</sup>韻書ニ  
竹子ヲ氣采キテ比<sup>ハ</sup>於物<sup>ヲ</sup>比<sup>ハ</sup>於物<sup>ヲ</sup>事<sup>ヲ</sup>於物<sup>ヲ</sup>  
云<sup>ハ</sup>リ○今梅<sup>ス</sup>ニ比ト興<sup>ハ</sup>ト姿情ニ先後ノ心得アリテ  
比<sup>ハ</sup>物<sup>ヲ</sup>取<sup>テ</sup>其姿ニ准<sup>ハ</sup>ト興<sup>ハ</sup>ト物<sup>ニ</sup>托<sup>テ</sup>其情<sup>ヲ</sup>起<sup>ス</sup>  
物<sup>ヲ</sup>催<sup>ス</sup>ト物<sup>ニ</sup>催<sup>ス</sup>ト角<sup>ハ</sup>差別<sup>ラ</sup>知<sup>ナ</sup>有<sup>ハ</sup>無<sup>マ</sup>ラ  
他説ノ微中氏解紹正云<sup>キナリ</sup>

興、訓美ニ興ハ誘引<sup>ナ</sup>ミ<sup>ナ</sup>リ爰ニ<sup>ハ</sup>誘<sup>カ</sup>言ト訓セシ和歌  
ハ喻<sup>ナ</sup>ト訓レスレト凡<sup>ハ</sup>ニ訓ニ紡<sup>ハ</sup>レ然<sup>ハ</sup>ニ興<sup>ハ</sup>  
ト凡<sup>ハ</sup>ノ和訓ハ六美ノ中ノ太騒<sup>ミ</sup>レテ我<sup>ハ</sup>ノ寃謾<sup>ハ</sup>  
如是<sup>ナ</sup>レト百世ノ明監<sup>ラ</sup>恐<sup>キナリ</sup>○今按スルニ興<sup>ハ</sup>  
一美ハ和諧トモニ令明ナラヌヤ去<sup>ハ</sup>論語ノ陽貨篇  
ニ子路ニ詩經ノ風流<sup>ラ</sup>鄙<sup>テ</sup>詩<sup>ハ</sup>可<sup>レ</sup>興<sup>ハ</sup>トハ四季  
ノ月雪花<sup>ハ</sup>良ニ誘<sup>カ</sup>レ<sup>ハ</sup>優<sup>ミ</sup>游<sup>ハ</sup>ノ情<sup>ヲ</sup>興<sup>ハ</sup>セ<sup>ト</sup>ノ  
謂ナリ然<sup>ラ</sup>似<sup>ハ</sup>朱註<sup>ミ</sup>、發<sup>ス</sup>志氣<sup>ヲ</sup>ト<sup>ハ</sup>  
云捨<sup>シ</sup>ハ孔子ノ宣給<sup>フ</sup>似<sup>テ</sup>而非<sup>ハ</sup>ル物ニヤ興<sup>ハ</sup>  
次<sup>レ</sup>遊興<sup>ハ</sup>ノ興<sup>ハ</sup>ト誰<sup>ス</sup>レ<sup>シ</sup>詩<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>心<sup>ハ</sup>之感<sup>ハ</sup>

物而形於言。之餘也トハ朱氏や詩序ニ云  
ナカラ何故ニ自詔相違セルヤ此等ハ教誡ヲ先ニレ  
文章ヲ後ニセシ論詔一部ノ取違ニテ失後ハ例ノ  
察スキナリ参考ヘ魚ハ魚ハノ義シテ詩歌ノ大本ト

知キナリ

### ○發句と和字のたれある事

むづり和字のすこ十八までの下ありて和字も連歌  
コレを此いはあれと前の所名トモとあらね  
ハ多う御の心地と莫くもやうやく自立するお

よあつとも、中古の歌謡より少くの名用  
あれば古今に連れて用ひあつて、ハノ歌謡の  
准則と同形の用の多くあると、一、少く  
やまと用ひて、物を對して互ひのまをせむと  
よきと持とて、物を二つもしくはより終  
あつて、第一章は發句とをあわりかをゆる  
正とすと、事と二字の儀あるやめす。よもやれと  
ひ事と餘物の助字とあらむ。よもじのまを  
あとよかと何誰とくくく哉。未と休むる  
へ遠く懐りかねて、釋てて、物を對のふる

あらまくのやうに云ふてすとすまうる  
日暮れ耶とさへ思ひもんが来事と坐  
まれへきるを承りとぞかのとあらゆる  
事令あはれトヤハキとすとてなほのと  
制札の件とさへ今○今持まわぬ件とあらゆる  
ひ中也と云ひ捨松や三上山あらわせとて心地  
ひびとせうかゆきとあらゆる

心切  
やうやくおひる  
夕の舟

又も併て下の章より詠と並後章よりと  
かゝる心詠とせんじて味あまきむとすれども  
差ふくらひゆれど未練のひがりと今うや子  
へあんれどもせんとひどくいふに詠と並  
れりとらひてかづくと石原のあひいわくか  
スセの向絶ゆくとくと詠と門ちゑよ心ゆき  
不吉とくとれとくとくと心節とてをえやすてゆ  
ぐれ、上段守候とてがゆもとく下段の御有りある  
とあくま全焉とやくとくがゆくとくとくの事の  
事とあくま全焉とやくとくがゆくとくとくの事の

窮謡とまゝ一ノ次や可と所着の辭に以て詠  
ひさわとまつゝ意句にてゆきのへ下ちる  
しあんせりを通の自信自信あるこそ其の名謡  
と豪ひて自よみれと送うむとむらされ不を  
のれあれもあらわとまつる石屋より感作と  
「信の二事あん

中ゆ　猪の夢やいしげ。猪の勝日

やとくとちて。いそよ月のモ

られけかし。あゝ御やじは。何くちて。何くとぞと  
ら詠とちとおよかが。うなとけむと高ぶ節

ちと句詠のよとまつて。せり。お中とこ。下よ  
こくらむす。中ゆとと。おとと。和歌。ひり。お  
向詠あり。讀師の人せり。ひと。有識のよ  
すはく。ひり。

捨杖

猿蓑

人よ。ふと。ひと。と。和歌。ひり。

芭蕉

けゆと全く新制。あ。と。と。と。あれ。ひり。お。  
自由の捨杖。あり。と。と。と。それ。よ。と。それ。よ。と。  
予物。對。ひり。差。よ。と。捨杖。と。と。は。否。よ。と。  
あ。と。う。今。捨杖。と。右。せ。う。合。と。和。青。連。歌。の。ふ

ハ後あつて各用とづれ新制され、近く一世の實談とを以て區くたせの内筆とす。一  
東老云「再機さうにけんもモヤハス」。而  
あれともちかくす。かくかく。オーフ物  
をかくすをよみがえす。はくはくねお廢  
のやくもよかと。まくらふもいりまきとよ  
みり。もじ同と。かくはくは。希世達と取  
もくに人ひり。があがめかと。もくと。今  
ぞと。まきまきと。まくと。中むちのに  
ふと。ぬくと。下はのかくと。自の

音向と。ゆくと。あがめ。も庫のつむぎと。怪  
まわの説く。顧我。さす用のむち生とある。  
やひきに。あるの音向と。漢書。

辛曉のねをも。しり歌。

はのと五絃の辛曉。てを其門の絶技り。う  
きをぬき。く。哉のひをと。わざれ。く。ふと  
ほまれ。もぐる。角のひ。下と。下せり  
の句絶。下と。と。下のゆ。や。もし。うれ  
え。うの。ひ。下と。角。おの。音。詠。と。あ。う。今  
滅後の角撲。あれ。あ。う。音。詠。と。あ。う。今

ましんやの筆と云ふ者とあひまへる中で  
そなへとまちをもあつたる所ある。物の  
廢りやじゆる所へて月勝膳とまく膳  
う寒食詩の用也とてはる。月と  
よそくいとの事ともあらへば、もろに  
うかやうかとてはる。要は詩れ凡て是と  
空とてはる。すむとてはる。とほりふやわら  
捨てやうすの向の自生の格。或はせと  
旅。とてはる。とてはる。とてはる。  
の前とてはるや東の向の錯綜もあり

久在と云ふ事もあらず仕事や四の代から  
まことに幕代の主とやうへけんと牛<sup>二</sup>、轡<sup>ミツハ</sup>と  
物とかげてりゆきとらふと様あつたあつた  
ゆくと云ふ事もやうへけんと牛<sup>二</sup>、轡<sup>ミツハ</sup>と

○ やく、とてのまへどもあつた

へえに新たのまこととお一をもへ

ニモカ忍かまへ。とまたおとんむけ  
キモチ子さへ。きわどくもれしに。

れど自家のやうあつてよ二つの用あれ、  
えすよふの用あれどそれと各自の不ぞひも  
角であのやうに押す様子のひびもあれ  
やまとやせりわくろー

事をふやまおれおこらふりとげの能がよ  
してよふらば同じおれわからむ押す押す  
あとづきをとつて論あれおやく角推しお

けニヤとまよけと敵對しておこらふり  
とあらはれんやとけやの儀とおじけは  
あらまざまとおれの心とおもひをあ  
圉極裏とおもひあつておれし。おののひ  
おありたの身とおれや。本作はまに御室  
哉。とおれとおれとてよやの身がやらひし  
敵對の身ふりやじとおれ。縛られへど  
てよやの解説とおれ。うちけるのとほ  
かほよくお起の詞。う木條もあつね

之真矣。故曰されや矣。わしも。湯山物の名れ  
と。ともかくやせ様とな。新制され。實淳  
へ附ゆ。すまや或と詮の題と。うり。給ふ。  
併事とある。かくうら。さんざんと。を  
賣られ。きと。あがね。被と。ひとと敵對と  
これ。再擇のや。可と。まう。と。ひう。  
或と連音。水。泄。溢。と。所。や。と。あう。と  
西家。の。也。向。あ。あ。あ。れ。と。論。と。れ。と。能。北  
石。た。と。○。う。接。ま。と。連。音。と。と。月。和。の。詮  
句。と。あ。て。中。事。お。ま。凡。公。の。ゆ。と。き。詮。が。は

や。事。す。第。向。と。あ。け。て。八。季。す。わ。に。辭。事。ま。の。と。ま  
い。さ。く。肩。雨。と。や。考。の。辭。向。あ。り。り。や。考。事。七  
八。事。す。向。あ。れ。み。ひ。て。と。二。底。や。と。じ。う。三。底  
ハ。例。の。こ。ふ。ち。タ。ハ。一。せ。と。ハ。

三。轟。切。　同。よ。ま。ま。よ。ふ。れ。と。ま。と。切。解。  
轟。あ。づ。ま。ま。あ。づ。ま。と。ま。と。切。解。

前。事。す。と。武。に。の。事。済。さ。う。躑。念。の。所。す。あり。出。れ  
ば。弓。の。絃。ま。る。不。と。同。よ。と。詮。易。と。つ。い。出。て。耳。と  
是。と。ふ。と。ね。く。か。く。ら。う。と。最。累。互。見。の。法。す。り  
や。と。之。序。の。詮。と。ま。く。一。後。事。す。と。や。い。の。聲。す

あつたまくも優游て極もありふ。あらう  
はうとせかひと。さればけはあんとせんじや  
そもれあうふまやと桂ねく食あれと  
結前生後の傳ありてさかへを極ふまがは  
とひやうす成の仰清都あうされと底の西界  
そきるべ一早春を向中よ切すあられおれと  
そとせ善ふどぞと底を例のふうちまえ  
二年かくよゆの例よりて底ゆあるふれ連詠  
のちおこさんあられ自家の詩句とあうよ  
るすりわく一せの豪傑と窮ひ

東菴云△再撰まことにゆの底を考へ  
はうちかすあつてらむりゆる時と一筆を  
勾留するて底もと底もあり一々れどもがふニ底  
の名目あられひありてやまと五月あつ連詠  
のちせよとひりてゆるて底の詩句あんと  
例の底あつ不作とてみるの詩句と信と  
ひととてよしよの名あれて底の詩句あ  
あうんやひきくに我の詩の詩句とまづねて差  
角撰の腕力とせんじと一せの豪傑が  
のとへ一せの豪傑とあらうあれ

二度也。又も。あま。に。うそ。れの。も。

寝襄

室解し。室やの瘦し。室中

あれ。け。テ。久。の。そ。と。ア。ス。月。の。寝。き。解  
め。も。も。の。も。あ。も。く。て。又。食。こ。し。い。も。あ。復  
行。き。そ。と。解。よ。二。度。の。言。ふ。り。に。ほ。も。と。  
詞。の。双。対。す。と。て。こ。と。向。と。移。せ。一。次。よ  
空。セ。と。外。舞。を。枯。本。寒。岩。の。森。か。ア。室。舞  
と。こ。え。く。の。事。歌。と。と。を。主。せ。ま。く。と。お。舞。行  
と。し。ま。く。を。事。の。ま。す。と。あ。ら。す。て。瘦。の。ま  
と。三。五。歌。の。格。と。稀。ま。く。一。行。く。と。五。り。よ。に。よ

御。代。と。お。署。と。御。の。ち。う。い。も。う。署。と。文。化。句。格  
と。も。も。と。一。ら。れ。と。れ。の。再。擢。と。望。み。の。隸。と  
と。ほ。あ。く。と。詰。ま。の。詰。法。を。減。ま。ん。御。ま。ん  
御。ま。ん。御。ま。ん。御。ま。ん。御。ま。ん。御。ま。ん

蓮。二。云。△。三。接。さ。る。に。け。ゆ。く。む。づ。く。今。か。又  
玉。ニ。解。と。三。解。の。絶。れ。が。は。ざ。れ。行。く。自。也。の  
行。向。と。あ。け。て。な。お。惑。い。と。と。う。と。と。は。ひ。あ。る  
人。の。通。よ。又。舟。母。す。葉。よ。キ。い。の。い。よ  
匂。を。被。つ。よ。三。解。よ。あ。ま。や。と。ま。ま。に。は。新。聞  
に。や。じ。の。ゆ。よ。お。と。向。而。き。父。每。子。比。能

ヨリ詳シシの用事と申候。かくまた  
抱あうてたるに、京風アリ。次のせりに  
至見ミ。さればお舟と苟革と文海ヨリま  
ハ駕籠のをありし端より駕籠のを有可  
あれど、やと云ふ所に、居候。居候所  
の車馬と云ふが、其を拝する所、御簾の  
御車也。前よりは月子と御簾の  
私物と駕籠一軒。さうい様。と在れ。松  
今もはれゆく月の花原と、殊べれど、駕  
籠をもと持てん。或と換骨のにて、そく

室や、寝の用事と云ふが、そのうち、此能切の三種  
うち、わざわざうけてちゆのうと、能切が、  
スセ五まで、あやまつたと、今もめりうる  
に、と物とすと、二角とあくへせんと、能の事等  
ひとともしわよ新たよ、差ふとさせとや

○心ゆき多名ある事

乍らよすのひまや、よしゆと、おけと、はて、申ゆ  
し、捨ねやし、ほア、京風、じ、御、或と、まつと、よ  
めり、御、風、と、申、中、能、御、と、お、下、候、も

かとぞきまわるまゝ里にひかへり  
の傳仰より書も立角をゆきのうと書く  
あらわすものと。もう少し年、ゆきは一年  
の秋とあくまでもやさしく。

かくも一月の事  
もくべりありと  
まくわらひの事

えやけゆのせりとくらへる。物事の脣  
あきへふ。とくとくも原能の抱字を取ふ。まく  
手本もあひまつて近づきとて見つめや  
侍は柳葉うなづきあきらまも兩種うあれま  
侍

まよ金の食月のゆとひとえへ取扱ふもせよ用  
石角トニシテモアレハシトモアリ

東莞へ出立。湖海の遠種。あつて前  
もとほの春。秋と稱す。其と  
後もとほの月。食閏と與す。  
詼諧より。やうもあつた。とせんれ。かまくの  
内に減り。再推のたゞ。ぬきの筋え  
の爲め。ひなづ。ちねふも。あれいかくの身  
よどせ。がたとえ。す。おもくの身と  
主として。ゆきゆき。ゆきゆき。ゆきゆき。

とてうるゝて千丈の巻とせうり字あらえまくは  
とあくとあけふうて、くわんとおとひゆう  
きはんじや、今もく再機のゆうてや  
一部のあれ計とやりへおこよと二京の名とく  
耶、字まくは京の名とおこよと二京の名とく  
しわくもれまくはとおこよと二京の  
半筋とつひ詔の正百十條とつうじ仰  
百千方傳よん傳と一言くすおはまくはと  
名あよゆくとくとくとくとくとくとくとくと  
あくがの在詔かねへむとくとくとくとくとく

はい或るの場所、あんまりよく見えぬとあれの捨詠  
生一言、一語の御名、ちりよし、まことの御名  
名あるやうと遺稿の大作、用意  
御の室様、よき

相の手。朝岬  
ひは。林あじよ。む  
えれ。朝山一  
田岳の角。ふも  
えす。まの。高  
き。と。まくら様  
あき。そ。まくら  
う。と。まくら。朝  
まくら。は。まくら。朝  
の。まくら。まくら。まく

相も新もあらず田家と称する有られ  
新嘗ありて向とからて祭の日と陽一月  
ある沒や新嘗の日と向にまち新の歳  
あらとやばやみ。又子せ佛と説とも云く  
田家のも新嘗と云ひても相も新も  
とめりてとまことかとあつて勤ぐ  
の新も新と音うるかとあつて勤ぐ  
あらとせ論あれど新と相の年方さん  
とひりすと所用の諦あきやまと新と神  
より相も向作の用とひりすと相の様

のとて官家と称はの事かへと相を田家の  
富もうちれやまへやこひま家へけ相を  
叶ひよる御とまへ一次は袖のじやまへと  
暖簾の戸柿屋の家にあつてあつて  
去来も武門の功とひりてお主宰人の名と  
称とりては御用とまへらへりてけ章よ  
かのまひ傳と袖のじやま富の二様あつ  
てお不常の体とありてとまへんとくと  
それの軒ひよ向とよむれと夫君の命  
あれひじうお葉隠とよむとくとくとくと  
角語

とほくどり也。再撰もうけゆと和歌も  
我あらあくよのとまくまとさひせうと。  
えとまふ。とがまうとと通例あれば、今此二章  
はとめのよかくふかくもとれとけうす  
ね字より村田のと味とあるときやと。すま  
の筆意とやがつこじ事とけやのむと。二三  
かたの事とじて事わざをあわりす。  
もの事ひと例と通例あまうあれハアリ  
コニセ。少まうとねとくとくとく  
東を左ねの名同は大廻とい云射ゆとる。

えあらに左のあらづれの神向ひんかばに没や  
云射の名せよ富ちり御家の事月とらひと  
れよ實譜の用捨あんう。う梅またもがまよ  
ゆまとらく極ひう。は格とらくあり脣口  
へあーうちねらしとあれ。和歌こす。歌に手ふ  
の名あらき。云射とよ極ひ。行す。通重せ。京  
て極ひとふ名の次來あり。それの和歌。う雲  
あらんづれの能造。う雲。かさんを妙と一格の  
名とあらハよ。今う實譜のと解ふよ。未だ

まうす所アマツコトは和歌ワカと書ふるもほれむ和歌ワカ  
さうし有一篇イチバン一解イハクと見様ミマチがり以下シモのふるが  
ともわらひとあるくと仰アヒきわればアヒくもく  
大廻オハラを妙タマらかな極ハシマひあんて事モノも有アリ且  
句詠ウタヒも。ものもあはへんとちくとと詠ウタヒ詠ウタヒ  
大まうオハラをうらやめ或オカルとすを詠ウタヒ詠ウタヒかよの入  
不あはれし者ヒトをばく詠ウタヒあへて詠ウタヒ各オハ  
コ名オハ日ヒとうらへてありてとまかとしよアマカと  
正マサニとくにうなづく在アリのせぬアシムと和歌ワカの  
名前オハと呼ハスす。能活ノハツの手話ハンドの用ヨウもあれば

人ヒトのひがひがしくてアマツも殊シテの人ヒト也ハやあひむ  
皆オハ神カミまシマせうてアマツの音オノとあひ  
ゆれアハラ化ハハル對アヒてアヒ謡ウタとアヒか詠ウタヒか  
万マツ呼ハスいアハスしろのアハシすアハシ言アヒ活ハツ不到アヒ  
名オハとくとアハシのアハシすアハシよアヒよアヒ  
東アマツ在アリ處マツおアヒ度アハス下アヒ例アヒのアヒうらに  
路アマツあアヒとアヒもアヒれアヒ一アヒのアヒ活ハツとアヒの  
詠ウタヒとアヒ一アヒとアヒくアヒ過アハスきアヒらアヒとアヒ對アヒ  
てアヒ和アヒとアヒすアヒくアヒあアヒとアヒ例アヒとアヒの  
孫アマツあアヒるアヒとアヒとアヒのアヒうらとアヒあアヒ

おのの名前とあえま  
の巖とあるものとあてま  
仰下のまことにあります  
御身の遺稿ときる  
て今お山とあらんまじ不當と珍る  
がまく西施う客をよめりあらう再び  
の名前北原林子でねこの名前は林子に昇る  
さんゆ一室詠と寫すまことや

大廻  
事のねじを  
りまとあくせく  
まじめにあらわす。  
いと云ふ例が湖南北貴近稿  
まじめにあらわす。

の事はとて御内より秋寂アキシキにて空車スカイの丸み傳  
も其事に付の事ハシナガ。あくまう御うちうふには五句  
の歌カタマリ。又詞カタマリと歌カタマリ。又清クヨウを  
1。蘿アサガホの歌カタマリ。あくまうねハシナガ。歌カタマリ  
而アラシ歌カタマリ。よしんとトドケ下シタ歌カタマリ。歌カタマリ  
主シメと大オよウ。歌カタマリ。歌カタマリ。歌カタマリ  
ゆヒ。古アリ。次タマリ。主シメの事ハシナガ。歌カタマリ。歌カタマリ  
係ハシナガ。歌カタマリ。歌カタマリ。歌カタマリ。歌カタマリ  
之シテ主シメ。歌カタマリ。歌カタマリ。歌カタマリ。歌カタマリ  
かカ。之シテ主シメ。歌カタマリ。歌カタマリ。歌カタマリ。歌カタマリ

某の口に傳へて居たる事は、此處に記す。其の後、  
行持の如きをもつて、鎧誦の如きの  
運命也。艶詞の如きは、かうして他儀の  
書寫の如きは、あくまでも格と考他のは  
ことの如ひで善用するやうにさへ、人  
業アリ。之を以て馬の文章誦  
常・地の如と極き。言葉遣は所の歌とほ  
ひにかねども、かくして詠れ。前句も、  
往々えまくことなく、起承を経て、前句も  
の餘先傳ありて、終り尾も、詠ともいへ

ひよふとちくわはてんと文さゆにあやひ有  
もきもあらましれたて和歌とそりてまの深  
いはせとすまの終りありあととちくとは  
和音せはせゆき一きとくとちくは森  
の音もむかへつねはまゆりあんてやはせた  
かうるまくとくおのはまゆりあんてやはせた  
のうはあんちやまゆりのとは  
うの言語不到のう育あうがおの二詠み様うが  
へ接続のゆことがうとくとくの育育と奉一を  
玄妙 まちやきをとあく月と梅  
あくくくいはれあくす秋の月

かはよせば二事と説むるにやうふに第  
つじてつひ中既といひ下既とすが大なりせ  
もれもくうえまよらがの間すゆぢてくわす  
を或と日すありとあすありと或と夕日と有  
るやうすれと秋月の者日としむとぞき  
ま春秋の朗詠とつてしはて後今の事均  
ありとゆふと歌嘆の余音とゆくとおの  
にとお向あんじてわやをひきうり密切の  
ゆくしよへされぐよすてまよすとあり  
人の貞うやうよへうわとおととが教へとぞ

マテル神妙のひはくうえや△再接もあひ  
ニ名を伝へておせ入角とおとすも解も解  
の詞とせつめの業目からうへ△温故  
知新キラフマテルが春のことをとあると一まれ  
一ほのまことうとおとすはおのとおひはす  
のうをとほとせむとあし

